

平成 27 年度 園芸特産業関係功労者表彰 受賞者功績概要

(敬称略)

のうじくみあいほうじん じゅうはちづか せいさんきょうどうくみあい
農事組合法人 十八塚りんご生産共同組合 (北佐久郡立科町)

昭和 36 年に任意組合を設立し、園地の集団化に加え、生産、育成、管理等を共同化して農家経済の安定を目指すという当時としては画期的な取組を行った。その後昭和 40 年には任意組合を発展的に解消して農事組合法人を設立し、賃貸借契約での園地集積による生産の共同化や財産・労務管理の共同化を進めるなど「企業的果樹経営」に先駆的に取り組み、地域農業の牽引役となった。

法人設立当初から「マーケットイン」の販売戦略を展開し、地元スーパーと連携した商品づくりを行うなど契約取引を積極的に進め、安定経営と組合員の所得向上に努めた。この取組は、多くの農業経営で採用されるなど地域への波及効果は極めて高い。

また、わい化栽培への更新と技術向上に取組むとともに、シナノスイートなど中生種への改植を推進し、県オリジナル品種の栽培面積拡大に貢献した。

つつ いもと ひろ
筒井 資博 (下伊那郡喬木村)

昭和 48 年にシクラメン栽培を開始。当時、シクラメンはまだ一般的に認知されておらず、栽培技術も確立されていない中、栽培方法の研究に熱心に取り組み、いち早く底面給水技術を確立して安定大量生産を可能とした。この技術は広く県内各地に波及し、本県シクラメン大規模栽培の礎となったほか、シクラメンの生産・出荷体系を大きく変える原動力となり、長野県が全国一のシクラメン産地としての地位を築く一翼を担った。

鉢花経営の安定化を図るため、シクラメン専作経営から鉢花複合品目生産に先駆的に取り組み、年間 20 品目を回転させる周年生産体制を確立し、他の鉢花農家の模範となった。

また、県内を始め全国各地から研修生を受入れて惜しみなく技術提供を行い、花き産業の人材育成に貢献した。

にし むら まさ たか
西村 方孝 (松本市)

昭和 50 年に就農し、酪農や野菜経営に従事。その後セルリー経営を経て、平成 16 年に当時県内ではまだ栽培者の少ない夏秋イチゴを松本地域で初めて経営品目として導入した。その後、先駆者として培地冷却など栽培技術の研究と確立に取組んだ。市場ニーズの把握に努め、県オリジナル品種「サマープリンセス」や「すずあかね」を導入し、現在では 40 a まで規模拡大している。

J A あづみの初代いちご部会長を務めるとともに、地域農業の振興を第一主義とし、研修生の受入や新規栽培者への指導助言に積極的に取組むなど安曇野地域の夏秋いちご産地化に尽力した。また、県主催で行われた「夏秋イチゴ生産振興プロジェクト」においては、現地体験実習の実習生を受け入れて指導を行い、夏秋イチゴ栽培者の増加並びに生産拡大に貢献した。

JA須高ぶどう部会（須坂市）

平成元年、須高管内5農協合併により「JA須高ぶどう部会」を設立。「全園地点検」等に取り組み、「高品質かつ生産量全国1位の巨峰産地」の地位を確立した。その後、将来の消費動向を見込んでいち早く「無核巨峰」の産地化に取り組み、県内巨峰産地の模範となった。

平成16年には、県オリジナル品種「ナガノパープル」を県下他産地に先駆けて導入し、課題となった裂果低減対策等「生産安定・品質向上」技術の確立に、果樹試験場及び長野農業改良普及センターと共同で取り組んだ。加えて、平行整枝短梢栽培の研究と導入を進め、県下「ナガノパープル」「シャインマスカット」の栽培面積拡大に貢献した。

また、JA須高と連携してPR活動を展開し、県オリジナル品種のブランド確立や消費拡大に寄与した。

ほしな たけ いち 保科 武一（中野市）

昭和47年に北信地域で先陣を切ってバラ栽培を開始。栽培技術の研究を重ねた結果、氏の栽培するバラは高品質で日持ちが良く、市場から高い評価を得るに至り、このことが産地全体の評価を高めるとともに、長野県花き産地の評価の向上に寄与した。特に、有効土層を確保する土づくり技術は、県主催の栽培技術研修会等において技術者に紹介され広く普及した。また、鮮度保持と日持ち性の向上に取り組み、この成果が地域に波及して多くのバラ農家の切り花品質向上に繋がった。

昭和52年には、氏が中心となって中野切バラ研究会を設立し、初代会長として定期的なほ場巡回や学習会、市場視察を開催して情報収集と技術研鑽に努め、バラの生産振興に貢献した。

また、毎月のように市場に出向いて実需者ニーズの把握とPRに努めるなど、実需を意識した販売姿勢は、多くの栽培者の模範となっている。